

将来の見通しを持つ 子どもたちの特性とは

先行きの見えない社会の中で重要になるのが、目標に向けて学び続ける力だ。しかし、将来の見通しが持てずに、学習意欲が低いままの子どもが増えている。そこで、小・中学・高校生の将来観に関するデータを用いて、将来の見通しを持つ子どもたちの特性を考えていく。

1 将来の職業や進路に関して、見通しを持たない子どもが増えている

図1 将来なりたい職業が「ない」の経年変化（学校段階別）



図2 進学希望の学校段階が「未決定」の経年変化（学校段階別）

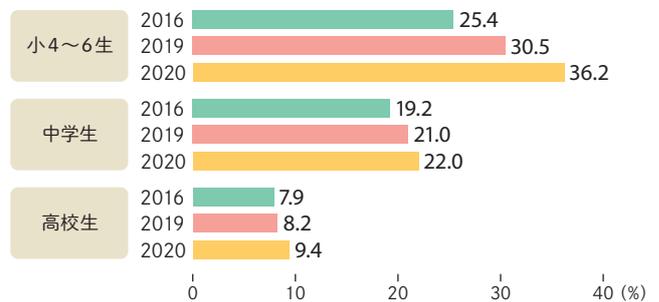


図3 将来なりたい職業が「ない」の経年変化（小・中学生の成績別）

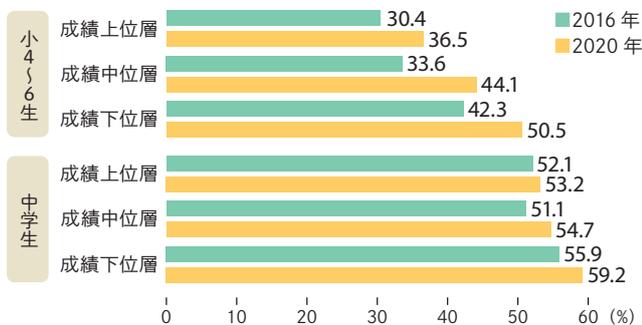


図4 進学希望の学校段階が「未決定」の経年変化（小・中学生の成績別）

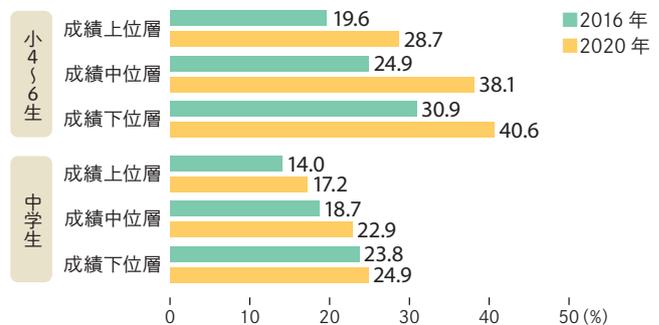


図1、図3 注) 数値は、「ある」「ない」の選択肢のうち、「ない」と回答した割合。

図2、図4 注) 数値は、「中学校まで」(小4～6生のみ)「高校まで」(高等専門学校(高専)まで)「専門学校・各種学校まで」「短期大学まで」「大学(四年制、六年制)まで」「大学院まで」「その他」「まだ決めていない」の選択肢のうち「まだ決めていない」と回答した割合。

図3、図4 注) 成績は、小学4～6年生は国語・社会・算数・理科、中学生は国語・社会・数学・理科・英語の自己申告による点数を合計し、上位・中位・下位が3分の1ずつになるように分類。

全国の小・中学・高校生を対象に、将来なりたい職業について尋ねたところ、「ない」と回答した子どもは、どの学校段階でも2016年から2020年にかけて増加している(図1)。その傾向は、特に小学4～6年生において顕著だ。

また、同じ期間で見た時に、進学希望の学校段階が「未決定」の子どもも、小・中・高のいずれも増加している(図2)。中学・高校生になるにつれて進路意識が高まるため、小学生よりは「未決定」率は下がるが、傾向は同様だ。

将来の見通しを持たない子どもが増えてきた背景には、保護者の教育意識の変化がある。図示はしていないが、本調査における保護者の『「学歴」は今より重視されなくなる』の肯定率は年々増えており、「できるだけよい大学に入れるように成績を上げてほしい」の肯定率も低下傾向にある。「子どもに身につけさせたいのは仕事に生かせる力で、必ずしも学歴だけではない」といった保護者の教育意識の広がりも反映されていると思われる。

次いで、小・中学生の成績別に将来

なりたい職業が「ない」の割合の2016年～2020年の変化を見ると、どの成績層も増加していた(図3)。同様に、進学希望の学校段階が「未決定」と答えた割合も、小・中学生ともにどの層でも増加していた(図4)。ただし、成績上位層の方が、なりたい職業が「ない」、進学希望の学校段階が「未決定」の割合は低い。背景には、成績上位層ほど明確な目標を持ちやすいと同時に、明確な目標を持つから成績が上位になるという双方向の因果関係があることが考えられる。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査 2016-2020」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。2015年から毎年、小学1年生から高校3年生までの親子約2万組を調査している。このうち、第2回調査(2016年)から第6回調査(2020年)までのデータを分析に用いた。

◎詳細は下記ウェブサイト(プロジェクトの進行状況)をご覧ください。

<https://berd.benesse.jp/special/childedu/>

データ解説

ベネッセ教育総合研究所
研究員

野崎友花 のぎき・ゆか



初等中等教育領域を中心に、子ども・保護者の意識や実態に関する調査研究を担当。近年は、保護者の教育意識や子どもの成長・発達プロセスに関心を抱いている。

2 将来の見通しを持つ子どもは、学習意欲が高く、社会に目を向けている

図5 「勉強しようという気持ちがわからない」の経年変化(学年別)

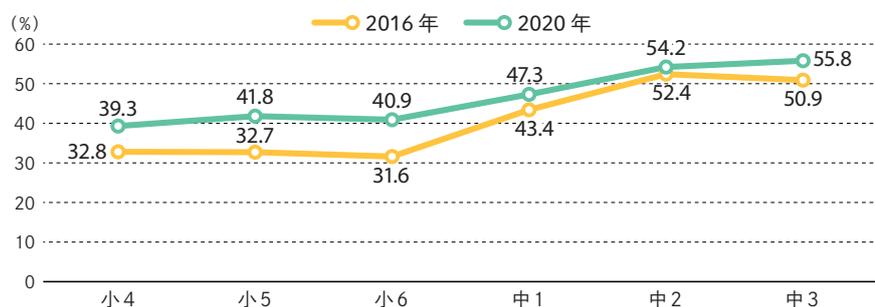


図6 なりたい職業の有無別に見た「勉強しようという気持ちがわからない」(学年別)

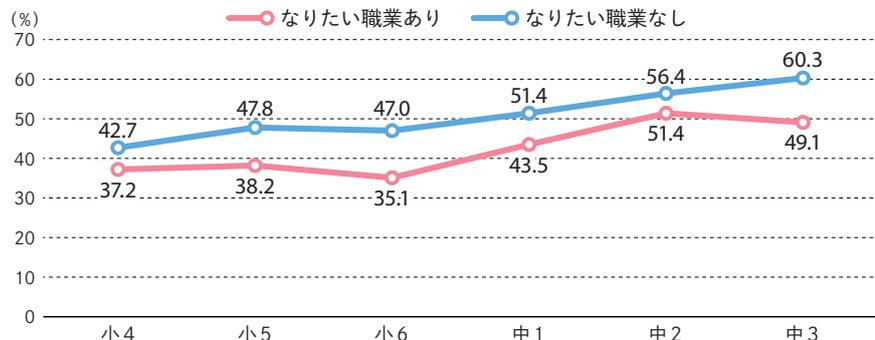


図7 なりたい職業の有無別に見た「これからの『日本』がどうなるか不安だ」(学年別)

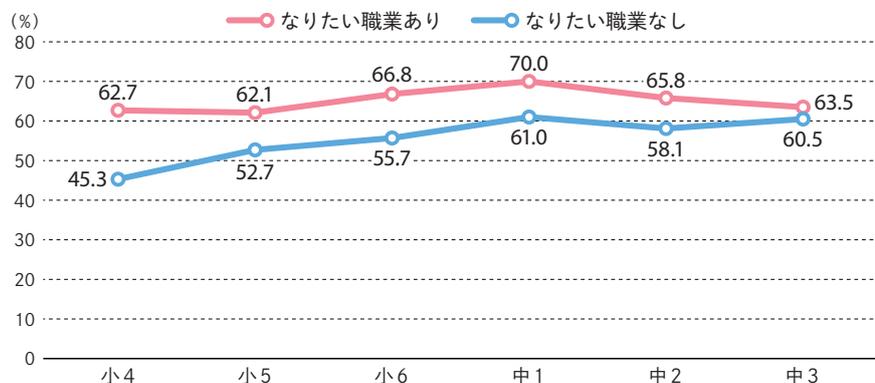


図5、図6、図7 注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の割合。

図6、図7 注)「なりたい職業の有無」: なりたい職業が「ある」と回答した人を「なりたい職業あり」、「ない」と回答した人を「なりたい職業なし」とした。無回答・不明は除外している。

次に、子どもの学習意欲の変化に着目する。「勉強しようという気持ちがわからない」と答えた子どもの割合は、2020年では2016年に比べてどの学年も増加していた(図5)。また、図示していないが、中学生では、1年生の成績下位層、3年生の成績上位層でその割合が高かった。2020年は、コロナ禍により学校が臨時休業となった影響で、1年生の成績下位層は中学校生活にスムーズに適應できず、3年生の成績上位層には受験生としての意識が十分に醸成できなかった可能性が考えられる。

以上の2020年の調査結果からは、将来の見通しを持っていない子どもや、学習意欲の低い子どもが増えていることが分かる。そこで、この両者の関連を見てみると、どの学年でも「なりたい職業がない」子どもほど、「勉強しようという気持ちがわからない」と答える割合が高かった(図6)。将来の見通しを持つことは、学習意欲を高めるための重要な要素だといわれるが、それを裏づけた形だ。

さらに、将来なりたい職業の有無別に、「これからの『日本』がどうなるか不安だ」と答えた割合を見ると、「なりたい職業がある」子どもの方が、不安を感じる割合が高かった(図7)。将来の見通しを持つ子どもほど、目的があるために学習意欲が高く、社会にもしっかり目を向けているからではないだろうか。

以上から、小・中学校では、「総合的な学習の時間」や教科学習の中にキャリア教育の要素を組み込み、子どもの目を社会に向けさせ、社会の課題を考えさせるようにしたい。コロナ禍においても、できる限り社会に開かれた教育活動を実現していくことが求められるだろう。